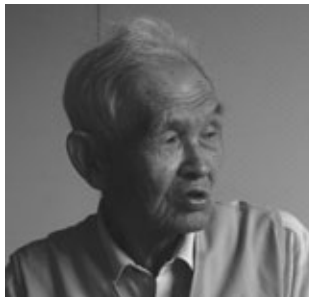


「おとふけ」の 伝承

私たちのふるさと「おとふけ」。先人たちの労苦があり、いま、私たちの住む「おとふけ」がある。広報おとふけでは、音更町に根をおろし、ふるさとを築いてきた人たちの後世に語り継ぎたいお話しを紹介しています。



山田 勲二さん
大正12年9月1日生まれ。
音更町字中音更在住

私の生い立ち

私

は群馬県藤岡市（旧日野村）の山間地帯で5人兄弟の次男として育ちました。この地域は耕作地が狭いため、山間の傾斜地に焼畑による桑を栽培していました。当時、米のごはんは年に5

回ぐらいしか食べられませんでした。麦ごはんばかりの生活でしたが、私たちの生計を支えていたのは、養蚕でした。昭和4年の大恐慌によって、繭価格が大暴落してしまい、この地の田畑のほとんどが人手に渡ってしまいました。

14歳で満州開拓

高

等科卒業後、「満蒙開拓青少年義勇軍」に入隊。2カ月の基礎訓練を受けて昭

和13年6月末、理想郷の建設を目指して満州へ渡りました。3年間の訓練期間を終えて

から開拓団に入り、1戸10畝の土地が割り与えられました。しかし、戦火が激しくなった昭和19年には、多くが国境守備隊に徴集され、開拓団に残っていたのは女性や子ども、老人がほとんどでした。

シベリア抑留4年

昭

和20年8月9日、日本の敗戦を知りました。は分岐点から北へ向かい、シベリアに着きました。その後4年間、道路や鉄道敷設の労働力として私たちが投入されました。零下50度の寒さと飢えの中で多くの仲間

は帰らぬ人となり、ほんとうに悲しい出来事が続きました。平成3年に、現地「タイガの丘」慰霊碑の除幕式に行き、亡き友に花や供物を捧げました。その地の光景を目の前にしたときに、私が詠んだ一句です。

〳累々とタイガの丘の盛り土に
戦友ら眠れり四十五年〳

新天地、音更へ

昭

和24年7月に帰国。しかし故郷の群馬県には働く場所もなく、大家族の中で食事も遠慮して食べる日々でした。そこで、十勝拓殖実習場の実習生に応募。1年間の実習を終え、音更村大牧地へ入植が決まりました。昭和26年3月、国鉄士幌線の列車に乗って、駒場駅から歩いて現地に到着したのが音更村への第一歩でした。

今日までの道のり

当

時、中音更大牧地域全体で、1800畝の土地に141戸が入植しました。1戸当たりの土地は約11畝、私の場所へくじ引きで光和地区の現在地に決まりました。その後、入植者が次々に結婚すると地域は子どもたちであふれ、「安心して畑仕事ができるよう保育所をつくりたい」と地域全体がまとまって町役場へ要請に行った思い出があります。今日の大牧地域は、畑作・酪農と恵まれた地域に発展しています。

後世に引き継ぐ

私

は、この地で生涯を終えたい。そして、誰もが安らげる場所を残したいと思っていました。地域には、子どもの数が減り、廃校になった光和小学校の跡地がありました。平成16年、2畝の敷地に、ミズナラの種を植えて苗木から育てるミズナラ1700本の杜づくりが始まりました。現在は、東屋や記念標柱も完成し、地域の人たちが集い、生きる喜びと憩いの場となっています。この「ミズナラの杜光和園」は、必ずや次の世代へと受け継がれ、「絆」を強める大切な故郷となっていくものと信じています。



地域の協力により完成したミズナラの杜に立てられた記念標柱